

森本雅樹先生追悼文集

森本さんの思い出は消えない

海部宣男（放送大学教授）



森本さん近影（撮影 森光 亘さん）。

日本の宇宙電波天文学の創設をリードし、世界初の宇宙空間 VLBI を実現、大学の活性化や科学の社会教育に大活躍をされた森本雅樹さんが、亡くなった。2010年11月16日朝、恒例の日本フィルハーモニー演奏会実行委員長として準備に訪れた鹿児島で、心筋梗塞による急逝だった。78歳。最後まで、元気で破天荒な森本さんのままだった。それから3カ月が過ぎたが、あの笑顔や存在感は、薄まることがない。

「森本さん ありがとうの会」は三鷹、姫路、鹿児島と森本さんの「3回の人生」の地で開かれて、どこも森本さんにふさわしく、賑やかで心のこもった会になった。申込みですぐ満員、多くの方々にお断りをしなければならなかったのも同じである。総参加者は、550名。以前、森本さんの古稀（70歳）のパーティーで、「古稀とは、古来稀なりということでありませう。しかし森本さんは、70歳なんかにならなくても、もともと古来稀な人なであります！」とやって拍手大喝采を博したが、亡くなっても森本さん、古来稀な人なのだ。

これまで「モリモトさん ありがとうの会」で話もし追悼文もいくつかの雑誌に書いたが、ここでは、そうしたところで触れることができなかった私と森本さんの個人的な思い出を、書かせていただこうと思う。

【宇宙電波に入ったころのこと】

私が宇宙電波天文学に志して東大大学院に入った（1966年）ころ、私の11歳年上、オーストラリア帰りの気鋭の森本さんは、赤羽賢司さんと宇宙電波を始めようと苦闘していた。観測設備はないから電波研究所鹿島の宇宙通信用30mパラボラの夜の時間を借りる「間借り電波観測」。私はここで観測し修論を書いたが、窮屈な観測のある日、森本さんは私を海岸に誘った。今の鹿児島臨海工業地帯は、当時まだ広い砂浜だった。人気のない浜に二人で並んで座り、森本さんは砂を手ですくっては落としながら、「天文台くらいいやなところはないよ」と漏らした。当時宇宙電波グループはリーダーの畑中武夫先生急逝の後、いろいろいじめられていたことを、私は後で知った。別グループの古在さんが何かと援助をされていたことも。

【宇宙電波ゼミ】

このころ宇宙電波では毎週論文輪講ゼミがあり、天文学に日の浅かった私には勉強になった。森本さんと仲よしだった寿岳 潤さんが必ず参加して鋭い質問を放たれたから、大いに刺激を受けた。森本さんは新着論文を実によく読んで、宇宙電波の最新状況に気を配っていた。何とか世界の第一

線に出ようという気概に燃えていたのである。

【6 m ミリ波望遠鏡】

東洋レーヨンからの奨励金を元手に三鷹で 6 m ミリ波望遠鏡の建設を始めたのは、1968 年である。三菱電機のエンジニアや法月鉄工の社長さんを学問の面白さで「誘惑し、たぶらかす」森本さんの手腕は、このころから大いに発揮された。その後の野辺山も含め、損得抜きで望遠鏡作りに取り組んだエンジニアの方々は、「モリモトセンセにたぶらかされてなあ」と、楽しそうに当時は振り返る。1970 年に完成した 6 m ミリ波望遠鏡は星間分子の観測で第一線に立ち、野辺山の大量計画実現への大きなステップとなった。

【宇宙電波分光学ことはじめ】

1968 年、アメリカのタウンズたちが宇宙のアンモニアと水蒸気分子の波長 1 cm 帯のスペクトル線を発見した。ついで、ホルムアルデヒド（有機分子！）の波長 6 cm のスペクトル発見。学部で紫外分光の研究室に出入りしていた私は、こりゃ大変だと思った。ミリ波帯には分子の回転スペクトルがザクザクある。すぐ分子分光学の権威・東大物理学教室の霜田光一先生を訪ねて米国標準局の分厚い分子スペクトルデータブックをお借りし、6 m ミリ波望遠鏡の建設現場に持ち込んだ。森本さんは大喜び、「うちに電話帳を持ち込んで星間分子観測に火を付けたのはこのカイフだ」と、海外から研究者が来るたびに宣伝してくれた。天文台の談話会で星間分子の話をし、それを『天文月報』に書けと計らってくれたのも、森本さんである（「星間分子スペクトル線の検出と“宇宙電波分光学”」1969 年 9 月号）。森本さんの目はいつも先を見て鋭く、行動は速かった。

【45 m ミリ波望遠鏡計画】

同じ 1969 年、森本さん・赤羽さんは口径 45 m の高精度ミリ波望遠鏡を建設する大計画を、日本

学術会議の天文学研究連絡委員会に提出した。その少し前、京都大学基礎物理学研究所の研究会に出ていた私は、森本さんに「ちょっとサボろう」と誘い出された。銀閣寺から続く「哲学の道」のほとりでビールをやりながら森本さんが切りだしたのが、この計画である。「泥は俺がかぶるから、一緒にやる気はないか」と言うから、生意気にも「僕にも少しは泥をかぶらせて下さい」と答えたあの時のことは、私には忘れられない思い出。

【縁側で議論した将来計画】

翌 1970 年、45 m ミリ波望遠鏡計画旗揚げの将来計画シンポジウムを企画した。森本さんはなんと私に、冒頭の宇宙電波将来計画提案をやれと言う。博士課程途中で助手にはなったが 26 歳、大学院生に毛が生えたとも言えない若造である。身震いがしたが、それでも家で構想を練り、日曜日にそれを持って森本家に相談に行った。森本さんは天文台の官舎の日当たりのよい縁側で、日向ぼっこをしながらの子守りだった（と思う）。書き込んできたカードを縁側に並べながら日本の宇宙電波が進むべき道を森本さんと議論したあの天気の良い日も、忘れられない。森本さんも後で、「あれは感激だったなあ」と言ってくれていた。幸い私の冒頭提案は高い評価を受け、古在さんは「世界一のことをやろうと言う大学院生が現れて驚いた」と、後に書いておられた。森本さんの、人を使う思い切ったやりかたのおかげである。いま思っても、よくあんな大役を任せてもらったものだ。

45 m の完成時、すぐにも共同利用観測をとるので、森本さんと二人で「36 時間交代」のオペレーターをやったのも、今思えば「無茶苦茶」である。

【VLBI への情熱】

あちこちで話したことだが、森本さんの電波天文学の大テーマの一つは「干渉計」だったと思う。野辺山の完成前からすでにミリ波 VLBI の実現について書いておられたが（『自然』1980 年 9 月号

「地球は一つの望遠鏡—VLBI—:クエーサーの謎を解くか?」, 1982年の45 m完成と同時に、井上允さん、平林久さんたちとVLBIに取り組んだ。実を言えば私は当時(星間分子が忙しかったこともあるが), VLBIで見えてくる天体はかなり限られたものと考え、消極的だった。そのことは森本さんとしては珍しく後でチクチク皮肉られたが、皮肉られても仕方がないと思う。日本のVLBIはその後、国内・東アジアVLBIネットワークや、世界初の宇宙空間VLBI(有名なVSOP)の実現にまで進んだのだから。

【酒も天文学も楽しくやりましょう】

書いてゆけばキリがないし紙数も尽きそうだが、やはり森本さんのエピソードからこのテーマは外せない。酒は、森本さんに大いに教えられたことの一つである。ただ森本さんの酒は時に危ないレベルになったから、それは心配だった。あるとき「あまり酒を飲まないで」と膝詰め談判した

ら、「これはオレの人生だからなあ」と返されて、それもそうだと、その後はあまり言えなくなった。

森本さんの「フェミニズム」の発揮も、特に国立天文台退官後、ボルテージが上がったようだ。天文台で久しぶりに森本さんの声が出て、部屋に来るかなと思ったら「○○さん(女性の名)」なんて呼びながら廊下を通り過ぎる、といったことが多かった。面高さんや黒田さんの苦労がしのばれる。ある年、集中講義に行った鹿児島大学で森本さんと構内のビヤホールに行ったら、向こうで飲んでた女子学生のテーブルからキャーッと歓声が上がった。おっ森本先生、人気あるなと思ったら続いて、「セクハラおじさん!」。

でも森本さん、やっぱり大人気なのだった。

ともかく楽しくやるのが、森本さん。もちろん、天文学も、である。これは何度も書いたが、私が学んだ森本さんの天文学は、「新しいことを」、自分の手で、「楽しくやりましょう」である。

森本さんの思い出は、色褪せない。

森本先生鹿児島奮闘記

面高俊宏(鹿児島大学理工学研究科教授)

1989年水沢観測センターに直径10 mの電波望遠鏡を新設し、野辺山45 m電波望遠鏡、郵政省鹿嶋宇宙通信センターの34 m電波望遠鏡とネットワークを組んで直径500 kmの望遠鏡を作る計画が進んでいた。私は1990年1月水沢観測所で開催された“次世代VLBIワークショップ”に乗り込み、「鹿児島に電波望遠鏡を作ったら直径1,306 km、日本列島サイズの大きな電波望遠鏡ができます。」と訴えた。この訴えに野辺山宇宙電波グループが動き出し、野辺山観測所の6 m電波望遠鏡を鹿児島に移設する計画がまとまった。森本先生鹿児島大学就任の2年前、1991年4月のことである。しかし鹿児島大学内では移設場所が決まらなかった。農学部も医学部桜ヶ丘キャンパスも

だめ。しかし私は秘策を持っていた。鹿児島市の錦江湾公園の高台にH IIロケットの実物大模型(高さ49 m)が建っている。この高台の下のグリーンベルト内に6 mアンテナを置くと絵になる。さっそく森本先生と赤崎鹿児島市長を市役所に尋ねた。約束の時間は10分。我々は計画を熱っぽく語った。時間が過ぎ秘書が来て「次の来客がお待ちです。」と催促した。未だ市長の回答はない。やむなく腰を挙げ、別れの挨拶をした瞬間、森本先生が「市長、このテーブルの穴は不思議ですね。」と発言。その瞬間、市長の目が輝いた。「よく気付きましたね。これは弾痕なんです。西郷隆盛が西南戦争で敗走し裏の城山に立てこもった時のすさまじい銃撃戦の痕が残ったクスノキで作った

テーブルなんです。」市長は饒舌になり、最後に「事務と会って相談してください。」森本先生の小さなチャンスを見逃さないしたたかさに感服した。

1992年9月、コンコンと研究室の扉をノックする音。開けると一人の女性が立っていた。「山梨大学助教授の鳥養です。森本先生が昨日山梨大学の学長に選ばれました。先生は教養部の教授に推薦されたそうですが、私たちは山梨大学を変える夢を森本先生に託したいのです。」圧倒的なパワー。けれども引き下がれない。正確な言葉は忘れたが、私も森本先生を鹿児島大学の学長にしてみせるとか……

森本先生は山梨大学の学長を断られた。国立大学学長の就任依頼を断った人はノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士だけである。山梨大学には大変申し訳ないことをした。

1993年4月森本先生が教養部教授に就任された。就任すると共通教育の講義を五つ開講した。またたく間に学生の関心をひき300人が座れる大講義室に立ち見が出るほどの盛況になった。

1995年4月には教養部長に選ばれた。時代は教養部廃止の嵐が吹きまくり、鹿児島大学でも1年前に改組案を提示したものの学部から総スカンを食っていた。嵐の中への船出だ。学部が反対したのは共通教育に関わりたくないからである。もし受け入れるなら個々バラバラに受け入れたい。退職後、ポストを専門に充てることのできるからだ。森本先生は理料系の教官はまとめて理学部へ、語学の教官は法文学部に外国語の学科を作る案をまとめて各学部長と交渉を始めた。しかし、交渉は難航した。

この交渉中、1996年10月ごろから学長選が始まった。森本先生は鹿児島大学改革案を訴え学長選に出馬した。初回は断トツの1位。ところが医学部から出てきた候補が全学を周り、教養部問題をテーマにきりくずしを図った。第2回投票では医学部候補が票をまとめ森本先生との一騎打ちになった。ある日、法文学部の教授が「語学の教官の問題と共通教育の責任コマ数を減らしてくれ」と交渉してきた。先生は即座にノーと断った。こ

の提案を取引材料にすれば勝てたのに。これで法文学部が離れ万事休す。私は全学を周り説得に努めたが僅かな差で負けてしまった。これも先生の大物さを証明するエピソードの一つである。

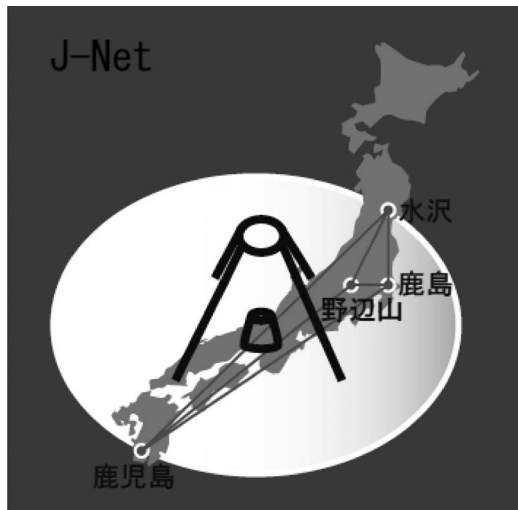
学長選には負けたが、先生は天性の明るさで教養部改組を推し進め、理学部を説得し理系教官は理学部へ、我々は宇宙コースを設立した。文系の教官は法文学部と教育学部に分属させた。

先生の退官時に鹿大広報に書かれた文章が興味深い。「5年前鹿大に来て、学問の自治を大学、学部、教授会の自治と狭めていって閉鎖空間を志向する大学の姿は、知っていたが印象的でした。大学は学生が入っては出る、本来開放空間です。鹿大教官の学外での目覚ましい活動を見ても、これが鹿大を開放空間にする力にならないのが不思議でした。閉鎖思考で情報が管理され、信頼関係は薄くなり、コップの中の嵐に強いが外の権力に弱い体制を生み出しています。自民党の派閥でさえ可能な組織の組み替えが自分の力ではほとんど不可能になっています。」と書いてある。

森本先生へ、「皆で進めてきた天の川の星までを年周視差で測量して銀河系の精密立体地図作りを目指すVERA計画も、図のように順調に進み、2月25日の日本天文学会欧文報告にVERA特集第2弾が出ました。鹿児島の学生、院生、スタッフの論文が掲載されています。」

宇宙グループもスタッフが8人、研究員、学部生、院生が20人以上の大所帯になってきた。望遠鏡も6m電波望遠鏡、薩摩川内市入来の鹿児島大学牧場内に直径20mのVERA望遠鏡、直径1mの光赤外線望遠鏡と3台を運用している。学生の教育としてもJAXAや国立天文台との間で概算要求で連携大学院が認められた。電波のVLBI大学間連携事業も6年前に予算化され、来年度からは光赤外線望遠鏡の大学間連携事業が予算化されようとしている。

先生は大学だけでなく、アウトリーチとして鹿児島在職中から日フィルの鹿児島実行委員会の会



1991年に水沢で開催されたワークショップで提案したJ-Net計画。



錦江湾公園の実物大HIIロケットと6m望遠鏡の前に立つ森本先生。

長をされてきました。観客が減少し経営が厳しくなりそうなので助けてほしいとの要請だったと思う。先生は知り合いの方に電話するとか、多くの会社や病院に支援を要請するとかで瞬間に立ち直らせた。この鹿児島の活動中での死でした。



VERAによる天の川銀河の精密立体地図作り
○が測量が終わった星。



鹿児島の望遠鏡（6m電波望遠鏡、20m VERA望遠鏡、1m光赤外線望遠鏡）。

昨日2月20日には東京、姫路に続き鹿児島「森本おじさんありがとう」の会が海部さん、黒田さん、日本フィルの二反田さん、そして私が代表になって開催された。130名の森本さんを心から愛した人々が集まり素晴らしい会になりました。先生、長い間ありがとうございました。

森本さんと兵庫

黒田武彦（兵庫県立大学教授・兵庫県立西はりま天文台公園）

1. はじめに

昨年11月16日の森本さんの急逝は驚きだっ

た。古希の祝い、喜寿の祝いをお世話させていただき、傘寿、米寿、卒寿、白寿までの予定表を参加

者のみなさんに配布した。森本さんから受けるイメージは、永遠の存在を思わせるものだったからである。まさかの死、11月17日に鹿児島から東京の自宅に戻った森本さんの前で約束した。海部さん、面高さんとともに私たち3人が呼びかけ人になり、森本さんが生前から願っていたパーティ形式の楽しいお葬式（それは自らのホームページに詳細に記されていた）を実現することだった。

東京（12月26日）、姫路（2月6日）、鹿児島（2月20日）の3カ所で開催した「森本さんありがとうの会」は多くの方の参加を得て終了できた。森本さんにも喜んでもらえる内容だったと思う。残す追悼企画は、森本さんが願っていた大型客船による傘寿の祝いである。傘寿の祝いは果たせなくなったが、誕生日の1週間後の5月20日から22日にかけて、那覇から石垣島の追悼クルーズを実施する予定である。多くの方にご参加いただければと思う。

2. 森本さんとの出会い

森本さんの存在は早くから知っていた。学生の頃から天文学会改革等での過激な？発言（集録等で拝見）や、雑誌「自然」などでの天文記事を通してである。やがてNHK教育等でもお見かけするようになり、そのユニークな語り口と話の展開に感動した。何とか講演をお願いしたいものと思ったのは、大阪市立電気科学館に勤務するようになって、大阪天文学研究会を結成してからである。1977年9月17日、その研究会で有料の講演会を企画し、150人以上の聴講者で会場が埋まった。講演は予想どおりのすばらしいものであったが、予想を裏切ったのは、講演後の懇親会だった。ここまでサービスが必要なのだろうか！初めて体感する踊りつきの歌「荒城の月が出た出た」には啞然とするしかなかった。これが衝撃の出会いの最初であった。以来33年間、三鷹の天文台官舎訪問に始まり、野辺山、鹿児島を経て、姫路でのご近所付き合いに至るまで、時には父のように、



図1 マチュピチュにて（2008年）中央が森本さん。



図2 黒田の授賞を祝って人物紹介をする森本さん。

またある時は親友のように楽しく、充実した時間をいただくことになった。

3. 兵庫への一步は遠かった

「定年になっても次の仕事が無いんですよ。黒田さん、雇ってくれない？」という話が飛び出したのは、東京の毎日新聞本社近くの喫茶店。青野由利記者との待ち合わせ前のひとときだったことを鮮明に覚えている。気楽に「じゃあ西はりま天

文台公園の園長として来ていただけますか」と答えたものの、私自身は本気ではない。ところが森本さんの「わぁー、それだったら喜んで…」の一言で、いつの間にか県知事にも話が通じ、県の最高幹部の一人と野辺山の官舎を訪れて正式依頼することになった。晴れて1993年4月に第2代目の園長として森本さんが就任することになり、県内の新聞にも掲載、告知された。

ところが想定外のことが起きた。その第一弾目は山梨大学学長選、これは森本さん自身が立候補したわけではないが当選してしまった。でもなぜかお断りになった。胸を撫で下ろしたのも束の間、全く何の前触れもないまま鹿児島大学教養部の教授として赴任することが決まったのである。森本さん、何が気に入らなかったの？と聞く暇もなく、私自身は事態の收拾に東奔西走する羽目になった。

後で聞いた話では、鹿児島大学赴任は予定されていた路線であり、西はりま天文台公園は特別付録(重要だが主たる目的ではない)だったのである。

少なくとも辞令は後からだった鹿児島大学事務からもいろんな条件が付けられて困り果てたが、1週間に2日(実際には月に2-3日)勤務いただく形で、兵庫県内部も何とか収拾できた。

4. 兵庫での森本さん

鹿児島大学ご定年後、自らを評して言った森本さんの「心地よい人生の下り坂」が兵庫県姫路市で始まった。私は鹿児島の1件もあり、兵庫県に対し、森本さんの扱い、評価をもっと高くすべきと進言していたため、天文台公園長に加え、もっと格上の施設、県立南但馬自然学校長も兼務することとなった。公用車で送り迎えのつく扱いだったが、森本さんは嫌い、自らの車を使いアロハシャツで通った。子どもたちとの触れ合いを通して、森本さんの教育観はさらに強固なものとなっていった。理科嫌い、自然科学離れは大人が作り出したもので子どもは自然が大好きなんだと。また、地域との触れ合いも楽しみの一つだったようだ。

鹿児島大学時代から、私にツアーコンダクターをやりたいと漏らしていた。ツアーコンダクターの具体的なイメージがつかめなかったが、それがサイエンスツアーであることがわかったのは、県立こども科学館構想の委員を私たちが務めるようになってからである。「森本おじさんのひょうごは大きな博物館」は、兵庫県のあちこちを巡り、本物体験をし、新たな発見の喜びを共有できる素晴らしいサイエンスツアーに成長した。箱ものは最早不要、森本さんの持論のとおり、大成功を収めた例だった。

5. 兵庫で天文学を

森本さんは園長になる前から、兵庫に天文学を根付かせようと働きかけを始めていた。県立姫路工業大学理学部に宇宙天文コースをつくらうと、学長の交替も何のその、計3人の学長に訴え続けた。大地震があってもかなり具体化していた計画は頓挫したが、訴え始めて10年近く、そろそろ形あるものにすべきと、天文台公園に知事来訪の機会を捉えて学長にも同席願い、森本さんと黒田の4人で夜の11時半頃まで焼酎談義とともに、宇宙天文コースの設置を訴えた。

2004年4月に県立3大学が統合し、兵庫県立大学が誕生するのを機に、自然・環境科学研究所内に宇宙天文系が設けられ、西はりま天文台内に附置できたのは、このような経緯を経たものである。森本さんのある種の執念が開花したのだが、研究所では不満だった。学生や大学院生とともに歩む態勢を求めている森本さんの思いを実現させるのは、残された私たちの役目だと思う。

6. 終わりに

森本さんが兵庫に居を構えて17年、その間の活躍のすべてを紹介することは無理である。ご近所の公民館のおばさん、スナックのママさん、酒屋の奥さん、魚屋の娘さん、肉屋のお姉さん、多くの人から愛され親しまれた森本さんだった。

亡くなる10日ほど前に、カラオケボックスに誘われた。カラオケといえばスナックだったがボックスは初めてだった。いい歳をした男2人というのが奇妙だが、1時間を歌いまくった。私に何か伝えたかったのだろうか。

笹尾さん、海部さんと並ぶのは名誉なことだ

が、森本さんが言う堅い人間の3人に黒田はいつも挙げられた。そうかもしれない、森本さんの指示どおりの「お葬式」を必死で頑張ったのだから…。大きな大きな感謝を込めて、ありがとうございました。

森本雅樹さんを悼む

近藤雅之（元東京天文台）

君がなくなったのを知ったのは新聞の記事だった。何時もどこにいるのかわからなかったが東京のうちに電話すると帰っているということで、最期のお顔をみる事ができた。急になくなったせいかすこしも衰えの見えない眠っているような穏やかさだった。

君とは大学の理学部以来の付き合いだが、電波にあってからのことはあまり知らなかった。岡武史さんがきたときに旧友だからと呼んでくれるような気遣いをしてくれたけれど、実は名を知る前から体操の時間などでみかけるだけで、やーすごいのがいるなと思ひ、それが天文とわかってやれやれとおもったものである。理学部の事務でも森本兄弟は有名だったが、数学の兄貴の影響もあったようだ。広瀬先生の天体力学は数学の部屋を借りてしていたが、C. Chevalleyのセミナーとぶつかって、シュヴァレイ先生を先頭に大勢入ってこようとしたのを君が一人でおしもどした。玉河さんが悔しそうな顔をしていた。君は清吾先生の子として旺文社の傾向と対策の下請けをしていたから、多分大学へ入る前から入試問題を受験勉強でなくアルバイトにしていた。わたしも君の友達になったおかげで清吾先生の風貌にも接することができた。4年のときだったか君が熱心に作っていたのがわたしが最初にみたテーブルコーダーであった。まもなく清吾先生がなくなってニコライ堂の葬儀で参会者への告別のお声を聞

かされたわけである。

君が子供のときから天文が好きだったのは天文月報の古いのをみればわかる。神田さんの天文研究会などで富田さんや佐久間さんなどと写っている写真がある。竹内泰子先生とは竹内先生の学校が6中に間借りしたときからの知り合いといていた。次に天文からはなれてラジオ作りに移った。秋葉原では佐藤無線がなじみだったといった。汚く見えても写真にすると立派に見えるのだそう。フレアーの研究会で沼津にいったとき増幅器を作る時間の早さに赤祖父さんをびっくりさせていた。天文に回帰したわけだが電波天文に行くのは、しごく当然だった。

天文の講義の多くは麻布飯倉であった。はるかに鹿野山をのぞめるはずの1等三角点のあるところである。君は電波でなくても、光学でも勝れた直観力を示した。すこしたってからなるほどと思わせられたことが何度もある。

しかし数少ないわれわれのところよりは本郷の物理の仲間の方がおもしろかったようだ。都物懇という会を作ってお茶大の人たちと交流したりしていた。つまり森本夫人はその名残である。

君のひとりの付き合いはいろいろ考えているのがよくわかった。それでもときに計算違いをしてみずいことになるのをみたこともあった。五月祭の準備のときに山内先生をおこらせてしまったりした。ずっとあとだが広島島の成相先生を怒らせたことも

ある。わたしは酒が飲めないので酒の付き合いはぜんぜん知らない。われわれ天文の仲間は君にひっぱられて多少とも世間が広がったようである。

天文の実習で夏休みに台長官舎に泊まりこんだことがある。天気が悪くてたいしてできなかったが10mパラボラで地平線をなぞって調布飛行場の発着の雑音を体験した。あとは雑談ばかりだが君

がサーベイをしたいんだとしきりにいったのを覚えていて。サーベイとは掃天、すなわち望遠鏡で空をくまなくなめてゆくことである。Landau-Lifshitzの場の古典論を読んでいたので知ってるがそれ以後疎遠になった。野辺山から帰ってきてよく高原野菜をくれた、逢うのも稀になって逢うとハグした。今は静かにしてるとつらいだろうと思う。

真実のしもべ、森本さん

森本雅樹さんの突然の死を知らせる短いメールは、11月15日の夜更け(チリ時間)に、サンチアゴの私のアパートにも届いた。以来、私の頭を離れないのは「もし森本さんがいなかったら、日本の電波天文学はどうなっていただろう」という思いである。

日本の電波天文学は、戦後の黎明期から1960年代の揺籃期を経て、野辺山宇宙電波観測所(1982年開所)で一気に世界の最先端に踊りでて、現在では、間もなく初期科学運用を開始するALMA(アタカマ大型ミリ波サブミリ波干渉計)の主要メンバーとして世界に確固たるポジションを占めるに至っている。その間、電波天文衛星「はるか」と地上のアンテナを結んだスペースVLBI(超長基線干渉計)望遠鏡(通称VSOP, 1997年打ち上げ)を世界の強いバックアップのもとで成功させ、また国内には精密な位置天文学観測を行うVLBI望遠鏡VERA(2003年観測開始)を展開している。最近の50年は、日本の電波天文学にとってまさに「坂の上の雲」ばりの大躍進の歴史であった。

このうねるような大展開が、多くの巨人たちの渾身の努力のたまものであることは言うまでもない。しかしその中でも、森本さんの果たした役割は、ほかの誰ともちがうユニークなものだったと思う。それは、常に人を驚かす新鮮な視点と、人

長谷川哲夫(国立天文台教授/国際ALMA観測所)

を誘惑する力によるものである。

第一の人を驚かす新鮮な視点という点では、学問を進める方向の定め方から、客にふるまう創作料理に至るまで、森本さんは徹底していた。「基礎科学はエンターテインメントだ」と喝破した森本さんだが、確かにその視点は人を楽しませワクワクさせたし、森本さん自身楽しんでいたにちがいない。それは、本質的に新しく魅力的な装置や実験を構想する原動力となった。

そうした新鮮な着想を実行に移すには、仲間が必要だ。森本さんは愉快地に飲み、夢を語ったが、自身のカミソリのようにシャープな側面をじかに見せるのを避けるところがあった。しかしその考えに独特のユーモアの衣を着せて「これをやるときとおもしろいよ」と話すと、それは聞く人の心に火をつけた。人は心に火がつくと、大きなうねりを起こすことができる。宇宙電波懇談会の結成や、スペースVLBIに対する国際的なサポートの機運づくりなどの場面で、その力は決定的な役割を果たしたのではなかろうか。

もし森本さんがいなかったら、日本の電波天文学の今の達成はなかっただろう。それを受け継いだ私たちは、果たしてそこからさらに新しい視点を打ち出して自分や他人を驚かし、うねるような運動を引き起こせているか? 大躍進の原点に立ち戻って、何が大切かをもう一度考える必要があ

るのかもしれない

まじめな追悼文なんか書いて、バカなやつだと森本さんに言われそうである。最後に森本さんの十八番を再録して、感謝の気持ちとともにご冥福をお祈りしたい。

「あ〜ら〇〇さん、いつもながら美しい」

「いやだわ、森本さんたら、心にもないことを」

「おじさんは科学者だよ」

「…？」

「科学者は真実のシモベなの」

ニコニコしながらシモベと言う森本さんの猫なで声が、今でも聞こえてくるようだ（きっとあの世でも言っているでしょう）。

森本雅樹さんの足跡

(近田義広さんほかの協力を得て海部宣男が作成)



1987年 仁科記念賞受賞の記念に。
(野辺山宇宙電波観測所にて)

【森本さんの歴史】

- 1932年 5月14日 東京に生まれる
4人兄弟の二男。父上（森本清吾），母上（治枝）のご両親とも数学者。中学・高校時代は『電波技術』に常時投稿するラジオ少年，天文少年として勇名を馳せる。
- 1955年 東京大学理学部物理学科天文学課程卒業
- 1957年 東京大学大学院天文学専攻修士修了
- 1958年 同博士課程中退，同大学東京天文台助手

- 1962-64年 オーストラリア電波物理学研究所
客員研究員（電波ヘリオグラフの建設）
- 1965年 東京大学東京天文台講師，博士号取得
- 1967年 オーストラリア電波物理学研究所
高級研究員（8カ月滞在）
- 1968-1970年 三鷹に6mミリ波望遠鏡を建設
このころから雑誌「自然」に常時寄稿
- 1970-1975年 天文月報編集兼発行人
- 1971年 東京天文台助教授
- 1978-1982年 野辺山宇宙電波観測所建設
- 1979年 東京大学東京天文台教授
- 1982年 東京天文台野辺山宇宙電波観測所開設
- 1986-90年 野辺山宇宙電波観測所所長，東京天文台・国立天文台技術部長
- 1988年 国立天文台発足，同 教授
- 1990-92年 国立天文台電波天文学研究系主幹
- 1993年 国立天文台退官，鹿児島大学教養部教授
- 1993-2002年 兵庫県立西はりま天文台公園園長
- 1995-98年 鹿児島大学教養部長
- 1997年 VSOP（はるか）打上げ成功
- 1998年 鹿児島大学退官
- 1998年 兵庫県立南但馬自然学校長
- 2002年 兵庫県立西はりま天文台公園顧問

【森本さんの受賞】

- 1985年 電子通信学会実用化業績賞
(45mミリ波望遠鏡の建設)
- 1987年 仁科記念賞（ミリ波天文学の開拓）
- 1988年 NASA Group Achievement Award
(TDRSによる宇宙空間VLBI)
- 2005年 Laurels for Team Achievement Award
(VSOP)

【森本さんの国際的活躍】

- 国際天文学連合 (IAU) 電波天文委員会委員長
- オーストラリア・テレスコープ施設評議員
- VSOP 国際科学評議会議長 等